# スライム最強伝説

clockman

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スライム最強伝説

【Ｎコード】

Ｎ０８３８Ｘ

【作者名】

ｃｌｏｃｋｍａｎ

【あらすじ】

訳のわからないうちに転生した俺が、世界の頂点に君臨するまでの物語。

## 俺、森でがんばる（前書き）

今回こそ続ける。

## 俺、森でがんばる

目が覚めると、スライムになっていた。冗談ではなくマジで。黒魔術の儀式とか、トラックに引かれたとか全くないのに、気付いたらこうなってた。

何でわかったんだ？って聞かれると、本能としか答えることができない。俺ってなんなんだ、って考えたら自然と『スライム』の４文字が浮かび上がってきた。青いことには青いのだが、某ＲＰＧのスライムとは全く違い、半透明の体でそのなかに赤い核がある感じだ。スライムは数多くあるＲＰＧ　の中でも常に最弱の地位を欲しいままにしている。第二？の人生は（種族的に）マイナススタートなのか。今後が思いやられる。

取り敢えず現状を確認してみよう。辺りを見渡すと、一面木だらけで後ろの岩の割れ目から水がチョロチョロと流れ出ていた。たぶん俺はこの水から生まれたんじゃないだろうか。いや、あくまで勘なのだが。

その後しばらく、今の自分が何を出来るのかを確かめていた。どうやら俺が思っていたほどスライムは弱くないみたいだ。

まず、この体は普通の生き物が触ればただでは済まないほど強い酸性の液体でできている。
そしてこの体、ある程度自由に形を変えることが出来る。具体的に言うと…触手だ。もしかしたらーみたいな感じでのダメ元でやってみたところ、すんなりと体の一部を触手に変えることができた。これは、念願の触手プレイが出来る！と思ったがその前に美少女がい

なかった。すぐにでも探さなければ。
ゲフンゲフン、話がそれたな。
だが、できたのは触手だけで、足とか手にはできなかった。レベルが足りないのか、それとも熟練度が足りないのか。とにかく修行してみるしかないだろう。

ここに留まっていたら他の生物に狙われるかもしれないから、安全な寝床を探すことにしよう。
ついでに何か食べ物を探そう。空腹感はないけど、何か腹の中に入れといた方が力が出る気がする。

そんなわけで、俺は食事兼寝床探しのために森を探索することにした。

三時間程歩いたとき、ちょうどいい感じの洞窟を見つけた。一応腹ごしらえは済ませたから、すぐにでも俺の寝床にしたいところだが中に他の生物がいるかもしれない。ゆっくり慎重にいこう。

思っていた通り、中には生物が…いや、モンスターがいた。
３mはある体に屈強な筋肉。ボサボサの長い髪に額から生えた一本の立派な角。仮に名前をつけるならオーガだろうか？それとも鬼だろうか。

幸い、オーガはぐっすりと寝ている。ここは大人しく引こうかなー。
と理性では思っているのだが、なんか行けそうな気がする。ここに

来るまでちょっと戦ってきたけど、俺、打撃にかなり耐性あるし、最悪核さえあればどうにでもなる。デメリットもあるがメリットの方が多い。

と言うことで、体を限界まで広げてオーガを包み込む。

オーガはまだ起きない。

そして一気に内側に圧縮。こうすると普通に溶かすよりも早く溶ける。

オーガが異変に気づき、目を覚ます。俺の中から逃げ出すために暴れだした。

オーガが暴れだしたことに、俺死ぬかも、なんて考えが頭を過る。でも表面は完全に溶かしきった。もう一息で筋肉がドロドロになって抵抗できなくなる。俺はこれで止めだと言わんばかりに力を込めた。

必死に暴れるも努力の甲斐なく崩れていくオーガ。最後の雄叫びを上げるも、ただの泡となって消えていく。

っしゃあ！勝った！

ダメージもなく格上を倒せた。物凄くレベルが上がっている気がする。それを見る術がないのが残念でならない。

オーガを倒したことで、俺の体は戦う前とは比べ物にならないほど大きくなった。もしかすると、食った物の体積分だけ、自分も大きくなるのかもしれない。これはいい収穫だ。きっとこの先役に立つ。

そして安全な寝床を手に入れることができた。これで夜の森で野宿なんていう危険度ＭＡＸなことをしなくてすむ。

なんて舞い上がっていた俺だが、さすがに疲れたので寝ることにした。

明日はもっと森を探検してみようと思いながら。

次の日、特に何事もなく目覚めた。人間の頃の日課だった二段ジャンプの練習をしようと、立ち上がって…足がないことに気づく。

あ、そういえば俺ってもう人じゃなかったんだった。

現実を再確認して陰鬱とした気分になってしまった。もう元には戻れないのか、いや、これは悪い夢なのではないのか。でも、昨日の戦いはどう考えても現実で、そして今こんなことを考えてる俺もきっと現実だ。

難しい事を考えるのはやめよう。それに、そんな暇があるなら、朝飯を狩りに行かないと。

洞窟から出ると、朝日はまだ昇っていなかった。早く起きすぎたのか。夜の森は危険だが、さっきから腹が減ってしょうがない。それに洞窟の近くなら安全だろう。うん。行こう。

こうして俺は、ここら一帯をなんの根拠もなく安全だと決めつけ、夜の森へと繰り出したのだった。

森に出てからしばらくした頃、ノシノシと何かが地面を踏む音が聞こえた。気になって行ってみると、固そうな岩でできた巨人（ゴーレムと名付けるとことしよう。）がいた。どこに向かっているのか観察してみたが、どうやら適当に徘徊しているみたいだ。右に曲がったと思えば左に曲がり、ジャンプしたかと思えば後ろに戻ってくる。そのときにビビってしまったことは内緒だ。

よし、一回こいつを食ってみよう。幸い頭も悪そうだし、いい経験値稼ぎになるだろう。え？岩なんか食えるのかって？なんの問題もない。自分の酸性の強さを調べた時に食べけど意外と美味しかった。感覚的には煎餅かな？まあ俺に歯なんてないし食感とかは全くわからないが。

もちろん正面から、なんて馬鹿なことはしない。

自分の体から先端を尖らせた触手を何本も出し、ゴーレムの足に突き刺してバランスを崩す。

ゴーレムは突然やって来た足の痛みによろけてしまった。

倒れそうになっているゴーレムを完全に倒すために、酸性を抑えた触手（昨日の夜たまたま発見した。）を両腕に巻き付けて一気に引き倒す。

何が起きたか理解できぬままに地面に叩きつけられたゴーレムはその痛みで我を取り戻し、こんな目に逢わせたスライムを殺すために、強引に触手を引きちぎった。

ゴーレムは思った以上に力強く、全力で巻き付けていた触手をいとも簡単に引きちぎった。体勢を立て直される前に、巻き付けていた残りの触手を強い酸性に変え、巻き付けを強めるとで両腕を切断する。そしてその岩をそのまま吸収して、引きちぎられた分の回復を行う。

両腕を無くしたゴーレムはすぐに足元の地面から土を補充し、新たな腕に作り替える。そうしたことによって完全に拘束から解放され、さらに足に刺さっていた触手も引きちぎり、穴の空いた部分を修復する。そして立ち上がることを邪魔するように襲ってくる触手を体に受けながら立ち上がり、触手が伸びてきている茂みを思いっきり踏んづけた。

と、思っているだろうがそれはフェイク。そこには茂みしかない。流石に何も考えずにその場に留まって攻撃なんてしてたら本体がどこにいるのかばれてしまう。そんな馬鹿なことはしない。
じゃあそこにいないのにどうやって触手を操ってるんだって？地面を掘って、自分から離れたところに触手を出して、そこから攻撃したのだ。ゴーレムは間違いなく俺よりも強い。本能でわかる。だから、地面に倒した程度で勝てるとは思っていない。もちろん起き上がられることも、フェイクを攻撃することも想定済みだ。でも再生したのは予想外だった。たぶんどこかに俺と同じように核があるのだろう。ということは、アレをするしかないな…

勝った。確かな手応えに、そう確信する。だが、その油断が命取り

だった。フェイクを踏み潰した数瞬後、四方八方から触手がゴーレムの巨体を蜂の巣に変えた。

必殺！『泣き面に蜂』（ニードルトラップ）一度相手を拘束し、そのまま触手で串刺し、もしくは一旦拘束を緩め、死んだふりをして油断させて串刺しにする現在最強の技である。

そして、再生する前に、持ち前の酸で溶かし、吸収。まだ核が壊れていなかったらしく、少し抵抗してきたけど、ごり押しで溶かしきった。そして、残っていた核をパクリと頂く。

その瞬間、とてつもなく強い力がみなぎってきた。もしかしてレベルアップか？そうだったら嬉しいな。ゴーレムを溶かした分、体も大きくなっているし、なんか新しい事ができそうな気がする。

いつの間にか空には日が昇っていた。朝飯だけにどんだけ時間かけてるんだ俺は。

まあいい。さっさと帰って何か変わったことはないか確認することにしよう。

その後、自分がどこにいるかがわからなくなってることに気づき、焦って適当に進んだ結果、巣にたどり着いたときにはすでに夜になっていた。

次に起きたときは、もう昼になっていた。生活リズムが狂ってるな、と思ったけど、ここは人間社会ではない。好き勝手しても、誰もいないのだから別に改善しなくてもいいだろう。

そんなことよりも、昨日出来なかった、何が出来るようになったの

か、を調べよう。自分を知ることは大事だと誰かが言っていたじゃないか。

結論

・腕を生やせた
・体を岩にできた
・縮めた

なんだこれは。岩になれるとか最早スライムじゃなくなってるし、スライムに腕なんて生えてたらキモいだけだし、縮むって、質量保存の法則軽く無視してるじゃないか。

一応説明しておこう。
まず腕。これは触手の上位版だと思ってれればいい。オーガやゴーレムのみたいな格上で人形のモンスターを食ったせいか、それとも俺が人だったからかはわからないがとても使いやすい。人の頃よりも手の数が多いから、こっちの方が便利かもしれない。

次に、体が岩になったこと。文字通り、ゴーレムのような岩の肌になった。もちろん固さも同じくらい。かといってガチガチに固まって動けない、なんてこともなく、スライムのような柔軟な動きも可能だった。しなやかな岩、みたいな感じだ。岩を食い過ぎたのか？って思ったけど、よく考えたらゴーレムの核食ったしその影響かな。でも岩の状態でも物を溶かせる事にはビックリした。

そして最後に”縮めた”ということは。いや、正確に言うと圧縮した。あの後、ゴーレム以外にも色々と食べたり飲んだりして、巣に戻ったときには中が物凄く狭くなったように感じてしまったのだ。せっかく手に入った巣なのに、一日で捨てるのはどうかと思って、獲物を食べるときみたいに、体を圧縮してみたら、なんと小さくな

ってしまったのだ。気になって詳しく調べてみると、どうやら圧縮することで密度が濃くなるらしい。何かを溶かすときに圧縮しながらすると早くなるのはこれが原因なんだな。ちょっと得した気分になった。

やりたかったことも終わったし、朝飯を狩りに行くとしよう。

昨日の今日でゴーレムみたいな大物と戦う気はないけど、レベルアップの為には通らないといけない道だから、また近いうちに戦う事になりそうだな。でも毎日は勘弁だ。流石に死ねる。それに今日は自分の力がどれ位になったかを確かめてみたい。よし、決めた。今日は岩化と腕だけで戦おう。

早速獲物発見。立派な角を生やした四本角の鹿の群れが、川のほとりでくつろいでいた。いつもはこういう手強そうなヤツには後ろから不意打ちをしている俺だが、今日は自分の力を測るためだから、真正面から攻撃を仕掛けることにする。

岩化した腕で近くにいたクワトロホーン（四本角鹿）を殴り飛ばす。（本当なら雄叫びを上げたいところだけど、残念ながら口がないので声を出すことができない。）事態に気づき、逃げようとするクワトロホーン。もちろん逃がす筈もなく、触手と同じ要領で腕を何本も生やし、真っ先に逃げようとしたヤツから捕まえて、そのまま飲み込んで食べる。

モンスターが滅多に寄ってこない、毒性のある川で休んでいた彼らは決して敵は来ないと油断していた。それ故に、予期しなかった敵襲に誰も反応することが出来なかった。我を取り戻し、真っ先に逃

げた者は皆モンスターに捕らえられ、成す術もなく補食されていった。逃げ道がないと悟った彼らは、少しでも生き残るために捨て身の特攻に出る。

何を思ったのか、こちらに向かって角を突き刺してくるクワトロホーン。その程度の破壊力では俺に傷を付けることも出来ぬわ！
と言っているが、もし岩のボディでなければどうなっていたかと考えたらゾッとする。スライムは打撃には滅法強いが、刺突や斬撃には全く耐性がない。要するに大ダメージを喰らうのだ。この事はオーガと戦う前に身を持って確認した。
でも、岩になると話は変わってくる。打撃耐性が若干弱くなるけど、刺突と斬撃に耐性がつく。そしてさらに体を圧縮することによって硬度が増し、ちょっとやそっとでは傷すら付かなくなっている。
だから、通常では大ダメージなクワトロホーンの攻撃も、今の体には殆ど効果はない。
つまり最初からこいつらが勝つことなんて出来ないのだ。

確かに当たっている。手応えもあるが、全く効いていない。このモンスターのあまりの硬さに角が折れた者さえいる。後は捕食されるのみ。彼らの心にあったのは、ただ絶望のみだった。

その後も、戦闘（というより一方的な蹂躙。）は続いた。多対一でも戦えることがわかったし、腹も膨れた。それに新しい…能力の性能も把握できた。まさに一石三鳥。

この際、能力名でもつけてみようか。

うん。いいな。ちょっと考えよう。

岩化は…『山の如し（アースアーマー）』とでも言おうか。

腕は…まあいい。帰ってから考えることにしよう。

## 俺、草原でがんばる（前書き）

テストで遅れました。

一週間に一回は更新したいです。

## 俺、草原でがんばる

あれから何ヵ月もたった。

俺はここら一帯で一番強いモンスター（めちゃくちゃデカい狼。火を吐いたり子分を呼んだりでなかなか強かった。三日ぐらい戦い続けてたと思う。）を倒したせいで新しい森の主にーみたいな感じになっている。

もちろん、俺はそのまま森の主にーーーなんてことはせず、さらに強くなるために旅立とうとしている。

人だった頃は才能なんてこれっぽっちもないありふれた人間だった。でもこっちに来てからは努力するほど強くなり、食べるほど大きくなる。要するに、楽しいのだ。

この世界で頑張れば、最強も夢じゃないかもしれない。そう思えてきた。こんな森の中でふんぞり返っている暇などない。

それともう一つ。俺が大きくなりすぎて、巣に入れなくなってしまったのだ。

縮めばいいじゃないか、と思うかもしれないけど、それは無理だ。あれ、実はかなり疲れる。人に例えるなら筋肉に力をいれている感じ。誰だって、常に全身の筋肉に力をいれながら寝たり食べたりできないだろう？

というわけで、更なる強さと寝床を求めて、いざ出発！

森を抜けると、そこは草原だった。草しかなかった。

っておい。この草原、地平線の向こうまで続いてんぞ。いくらなんでも広すぎだろう。それにモンスターもいないし。

なんて思ってたら、いきなり、上から衝撃が来た。

危ねー。反射的に岩化＋硬化（圧縮）してなかったら、今頃水飛沫になってたぞ。

何が襲ってきたんだ？と思い、ソイツを見てみると…

青に白の斑模様がついた饅頭のようなデカい頭がフヨフヨと浮かび、その下から伸びた何本もの触手生えている。どこからどう見てもクラゲだった。

おかしいな、こんなに目立つヤツならすぐに気づくのに。まあいいか。

浮かんでることには触れないのかって？この程度なら森にもいたから慣れた。

硬くなった俺にぶつかって伸びてしまったクラゲ。ちょうど小腹が空いたところだし、パクり。独特の歯応えとほんのりとした甘さ、うまい。

その後もが襲ってきたが、僅かな気配を頼りに硬化することでGホイホイならぬクラゲホイホイのように楽々撃退。すべて美味しくいただきました。

どうやらこのホバリングムーン（俺命名）、とても優れたステルス機能があるらしい。
何もないところから衝撃が来たと思ったら、そこにホバリングムーンがいたから間違いない。僅かだけど気配もあったし。でも光が屈折して違和感が、とかも全くない。現代では実現不可能な程の見事なステルスだった。まあほぼノーダメで倒したんだけど。あと、ここに他のモンスターがいないのもホバリングムーンが原因だろう。普通のモンスターがここを通ったらすぐに不意打ちされて食われてしまう。でも、獲物もいないのに、こいつらはどうやって食い繋いでいるんだ？謎だ。

もう日がくれてきたな。でもここで寝たら間違いなく襲われて死んでしまう。暫くは不眠不休で進むことになりそうだ。

あれから何時間たっただろうか。ずっと歩いているにもかかわらず、景色が全く変わらない。スライムの移動速度が遅いんじゃないか？とか考えているヤツもいるだろうが、それは大きな間違いだ。スライムは、体の表面にある液体をすべてタイヤのようにをグルグルと高速で回しながら移動する。スピードに直すと…時速５０ｋｍほど。モゾモゾと這って動くわけではないのだ。それを一日中続けているというのにこの状態。わかってはいたが広すぎだろ。
空もすっかり暗くなり、月（この世界では月が全く欠けない。常に満月だ。）が登り始めた頃、何もないところから突如仄かな青白い光が無数に現れた。

ってあれホバリングムーンじゃねーか。何で光ってんだよ。すげーな。絶景だぞ。

ん？脅威のステルス機能が解除されてるってことは、こっちから攻

撃できるってことじゃ…

と言うことで、唐突に始まった『消えないクラゲはただのクラゲだ』作戦。クリア条件はモンスターの全滅。制限時間は日が昇るまで。張り切っていくか！

とりあえず、触手を出せるだけ出して、フヨフヨ浮かんでいるホバリングムーンを手当たり次第に掴んで、地面に叩きつける。打撃に弱いらしく、一発でノックダウン。ぐったりしている隙に、そのまま飲み込む。まさに一方的な虐殺。今の状態を表すのにそれ以外の言葉はいらないな。

ホバリングムーンは自分のテリトリーに侵入してきた外敵排除するべく、岩のようなナニかに攻撃を仕掛けた。が、外敵は予想よりも遥かに強く、ただ食われるばかり。命の危険を感じたホバリングムーンは、最終手段に出る。

ん？急に一ヶ所に集まりだしたぞ。何をするつもりなのか…

ホバリングムーンの相手が思ったより余裕だったせいか、つい油断してしまい、何もせずにぼうっと見ていた。幾つもの小さな青い光が徐々に大きくなっていく。そしてそれが強く光輝き草原を昼のように照らしー

空を覆い隠すほどの巨大なホバリングムーンが姿を現した。

って、合体した！？いや、なんとなくそんな雰囲気はしてたけど、本当に合体しただと！

…落ち着こう。こんな事態になったのは戦闘中にも関わらず油断していたせいだ。こっからは本気でやる。

何本もあった触手の腕を左右二本に束ねて、巨大な腕に変え、釘のように尖らせる。地面から土を補給し、合体したホバリングムーンーホバリングフルムーンの大きさに対抗できるぐらいまで巨大化する、ギガンテスモードになる。実は俺、あれからいろいろあって、土を取り込んで巨大化することが出来るようなったのだ。詳しいことは…そのうち話そう。

自分と同等の大きさになった侵入者を見て、手を抜かれていたのだと悟る。草原の王者として君臨し、今まで自分のテリトリーを犯した者を圧倒的な力を持って葬り去ってきたホバリングフルムーンにとって、この事実は王者としての誇りに深く傷をつけた。ホバリングフルムーンにとって幸いだったのは今宵、夜空には雲一つなく、月の光が輝いていること。今、草原の王者の反撃が始まる。

攻撃が急に速くなる。どうやら相手も本気になったみたいだ。

一つ一つの威力は弱いものの、それが積み重なっていくと、さすがに無視できなくなる。避けようにも自分の体が大きすぎて小回りがまわりが効かず、当たってしまう。
何回か触手を引きちぎったが、次の瞬間には何事もなかったように生えてきてしまう。腕も四本に増やしたが、依然として状況は変わらず。
これじゃジリ貧だな。どうするべきか……！

お遊びは終わりだ。と草原の王者は心の中で笑う。触手の相手に気を取られているせいか、頭（フヨフヨの饅頭の部分）に青い光ーー魔力が貯まっていることに気が付いていない。全ての触手を侵入者の両腕に突き刺して、無理やり広げる。決して少なくない数の触手が引きちぎられるが、そんなことは些細な犠牲だ。

そして、ホバリングフルムーンは触手の奥に隠れていた”口”を大きく広げてーー

雷を何本も束ねたような巨大な閃光を放った。大気を割るような轟音が響き、核爆弾が爆発したと言われても納得してしまうほどの黒煙が辺りに立ち込める。

自らの最強で最高の一撃を放った草原の王者は、確かな手応えを感じ、勝利を確信する。

大きな風が煙を払い、侵入者が姿を現す。閃光は侵入者の体の2／3を奪い去り、辛うじて残った体も、土に戻って風に飛ばされていく。

目の前の惨状から見ても、自分の勝利は確実だろう。戦いは終わったのだ。草原の王者は、エネルギーの消費を抑えるため、元のホバリングムーンへと分身しようとーー

その瞬間、地面から突き出た無数の柱が、草原の王者ーホバリングフルムーンーを指し貫いた。

フハハハ。倒したと思っただろう？

囮だよっ！

奥義『泣きっ面に蜂（ニードルトラップ）』今回もしっかり決まった。

しかし危なかった。あとちょっと気付くのが遅かったら間違いなく死んでいた。あの殺気を感じ取れなかったらと思うと冷や汗が流れ

る。汗なんて流れないが。

だが油断は禁物だ。調子に乗って後ろからズドン、なんてことになったらそれこそお笑い草だ。再生されるかもしれないので一欠片も残さずに食べきる。

食べたことによって消耗したエネルギー（体）が充填されていく。

よし、行くか。

草原はまだまだ終わらない。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0838x/

---

スライム最強伝説

2011年10月7日13時57分発行